

平成26・27・28年度 関市教育委員会課題研究校指定

平成27・28年度 関市教育委員会 ICT 機器活用の調査研究校指定



研究主題

人とかわり、考える力、伝える力を高め、自分を見つめる子をめざして
～主体的に取り組む探究的な活動を通して～



平成28年11月22日

関市立南ヶ丘小学校

はじめに

本研究を始めて2年半、今、子どもたちは、楽しそうに「考えること」「仲間と話し合うこと」に取り組んでいます。特に、総合的な学習の時間の授業について聞いてみると、「いろいろな疑問が出てきて、どうすればいいのかなと考えることが楽しい。」「話し合いをすると、自分と違う意見が出てきて、なるほどと思った。」「地域の方の気持ちが分かったら、みんなに伝えたくなった。」と話しています。このような思いを子どもたちが少しずつもつようになったのが、本校の研究です。

生活科・総合的な学習の時間の研究は、当初、何から始めていくとよいのか手探り状態でした。まず、子どもの関心を高めていく授業づくりのために、地域の人材を発掘していきました。そして、研究を通して、「願う子どもの姿」が明らかになってきました。

- ・教師が、子どもの「なぜ」を授業に位置付けたり、仲間との話し合いで付箋紙を使って一人一人の考えを可視化したり、学びの出口を「発信！南っ子タイム」として伝える場を明らかにしたりすることで、子どもが自ら考え、自ら動き出す姿
- ・比べたりまとめたりして深めた考えや、伝えたい相手に発信するための工夫を力として、意欲的に仲間と交流する姿
- ・自分たちの住んでいる南ヶ丘小校区や関市には、地域や産業のことを大切にして活動しておられる方が多く住んでいる。今の自分には何ができるのかと自己をみつめる姿

遅々たる歩みながら、この研究を通して子どもは、私たちが描いていた「願う子どもの姿」を少しずつ見せています。特に、人とかかわることで、その人の生き方に感動し、自分ができることは何かと考える姿が多く見られます。やはり「人の生き方」には子どもを変容させる大きな力があるということが分かりました。手立てとして活用した「思考ツール」「ループリック」「ICT 機器」も子どもの意欲につながる有効なものであると感じています。また、これらは、教科や他領域にも広がりつつあり、うれしいことです。

職員は、子どもの「主体性」を育てたいと常に考え、相談したり、事前取材したりとひたむきに取り組んできました。職員室で、楽しそうに授業を組み立てている様子からは、この研究そのものが教師の考える力を引き出しているのもであると感じました。そして、一人の職員がつぶやくと他からよい手立てが出される等、支え合う職員の姿が多く見られ、この研究は、「チーム南ヶ丘小」としても確かなまとまりをつくる素になりました。このような本校職員の支え合いが、今回の実践から得た宝の一つです。

最後になりましたが、研究を進めるにあたり、関市教育委員会をはじめとする多くの指導者の先生方にご指導を賜り、心より感謝とお礼を申し上げます。

また、ご多用の中、ご参会いただきました皆様から、本校の子どもたちの姿や研究等につきまして、忌憚のないご意見をいただくことで、新たな研究のスタートにしたいと考えています。どうぞよろしく願いいたします。

平成28年11月22日

関市立南ヶ丘小学校 校長 酒井田 澄子

人とかかわり、考える力、伝える力を高め、自分をみつめる子をめざして ～主体的に取り組む探究的な活動を通して～

1 主題設定の理由

本校は、平成25年度までは「すすんで学習に取り組む姿勢づくりや基礎学力の定着」をめざして、算数科を中心に研究を進めてきた。その結果、算数科の学び方が身に付き、基礎学力が高まってきた。全国学力・学習状況調査においても、算数科の基礎的基本的な学力は岐阜県の平均正答率を超える結果となった。しかし、自分の考えを書く力や文章を読み取る力には弱さが表れており、思考力や表現力の育成が課題として残った。

そこで、このような課題は、生活科や総合的な学習の時間の研究を行うことで改善できると考え、平成26年度「関市教育委員会課題研究校」の指定を受け、生活科と総合的な学習の時間を主題研究として取り組んだ。児童が親しみをもって地域の方と交わりながら、自分の課題を見つけ、探究的な学習を進めることで、目的に応じて文章を書く力や読み取る力を伸ばし、さらには、学習したことを発信していくことで表現力を高め、よりよく生きるための資質や能力を育成することができると考えたからである。

平成26、27年度は「主体的に学ぶ意欲がもてる地域を生かした魅力ある題材開発」や「人とかかわる体験活動を各単元の中に仕組み、人とかかわりながら自らの考えを深める学習活動の工夫」を重点とし、研究を進めてきた。その結果、地域に密着した学習を取り入れたことで、主体的に取り組む児童の姿が見られるようになった。また、児童の素直な疑問「なぜ」を生かすことで、継続した探究的な学習を実践することができた。

一方、「発信！南っ子タイム」という全校児童が保護者、地域の方に学んだことを伝える場を設けたことで学習の出口が明確となり、意欲的に取り組む姿が見られ、伝えたい人に分かりやすく工夫して発信する力が身に付いてきた。

さらに、平成27年度からは、思考力を身に付けるために自ら考える場や仲間と意見を交流する場において「思考ツール」を活用した。この「思考ツール」を活用したことで思考が可視化され整理された結果、話し合う目的や内容がぶれることなく、互いの意見を正確に伝え合うことができるようになってきた。また、平成27年度より「関市教育委員会ICT機器活用の調査研究校」の指定を受けタブレットを活用したことも、児童の興味・関心・意欲を高め、意見交流の場で分かりやすく自分の考えを伝えることにつながった。児童も「みんなまで話し合いながら、学習していくことが楽しい。」と言い、「総合的な学習の時間が好きである。」と全員が答えている。しかし、自分の生き方を見つめるという「深まりのある学び」にまでは到達していないことが課題であった。

そこで、本年度は、「単元指導計画の見直し」や「思考ツール等を活用して、仲間との話し合いを深めていく学習活動の工夫」を重点とし、思考力や表現力の育成を目指した。研究主題を「人とかかわり、考える力、伝える力を高め、自分をみつめる子をめざして～主体的に取り組む探究的な活動を通して～」とし、次のような実践を行ってきた。

2 つけたい力

- 自ら課題を設定し，進んで考えることができる。
- 自分の考えを分かりやすく書いたり，伝えたりすることができる。
- 人とかかわることを通して学んできたことを，自己の生き方につなげることができる。

3 研究仮説

地域の多くの方とかかわり，ものの考え方，生き方にふれる活動や伝える場を計画的に位置付け，「思考ツール」や「ルーブリック」，「ICT機器」などを活用した話し合いを行えば，児童は主体的に考える力や伝える力を高め，自分の生き方を見つめることができる。

4 研究内容

1 探究的な活動を促す指導計画の工夫

- ① み（みつける）・な（なぜ?）・み（みつめる）学習過程「南ヶ丘小版サイクル学習」を単元指導計画に位置付ける。
- ② 「伝える場」を効果的に位置付ける。

2 学習活動における指導・援助の工夫

- ① 小集団による話し合い活動の場を位置付け，「思考ツール」を活用し，児童の考える力，伝える力を高める。
- ② 「ルーブリック」を生かした自己評価を取り入れ，児童の学習意欲を高める。
- ③ ICT機器を効果的に活用し，考える力，伝える力を高める。



5 具体的な研究実践

【研究内容1 探究的な活動を促す指導計画の工夫】

① み（みつける）・な（なぜ）・み（みつめる）学習過程「南ヶ丘小版サイクル学習」を単元指導計画に位置付ける。

児童の学習意欲を持続させるために、学習過程を工夫した。まず、体験活動を重視し、体験したことから感じたり考えたりして見つけたことを宝物とする「みつける場」、次に見つけたことから疑問に思ったり、不思議に感じたりしたことを明らかにする「なぜ（課題をもつ）の場」、さらになぜだろうと疑問に思ったことを調べ、発見した結果についてじっくり考える「みつめる場」を単元に位置付けた。この3つの場（みつける場、なぜの場、みつめる場）を、単元に意図的に位置付け「南ヶ丘小版サイクル学習」とし、常に「なぜ」を意識させた主体的な学習を目指した。

また、この「南ヶ丘小版サイクル学習」では、「みつめる場」において、学習が終わってしまうのではなく、そこから再び新たな疑問「なぜ」を生み出し、次の「みつける場」や「みつめる場」につなぐといったスパイラルな流れになるように工夫した。（参考にした資料図1）それは、児童の意識が途切れることなく連続するため、児童の主体的な学びにつながると考えたからである。そして、「み（つける）・な（ぜ）・み（つめる）」という「南ヶ丘小版サイクル学習（図2）」を単元指導計画の中に位置付けるとともに、「みつける場」「なぜ」「みつめる場」といった単位時間ごとの授業の役割を明確にした。（図3）

（参考にした資料）

図1 探究的な学習における児童の学習の姿
（「今、求められる力を高める総合的な学習の時間の展開」より）

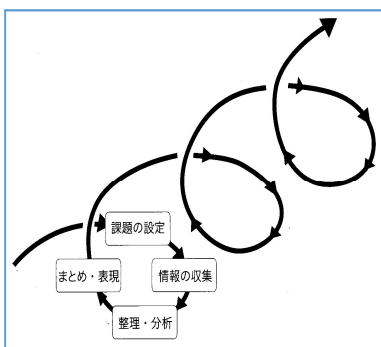
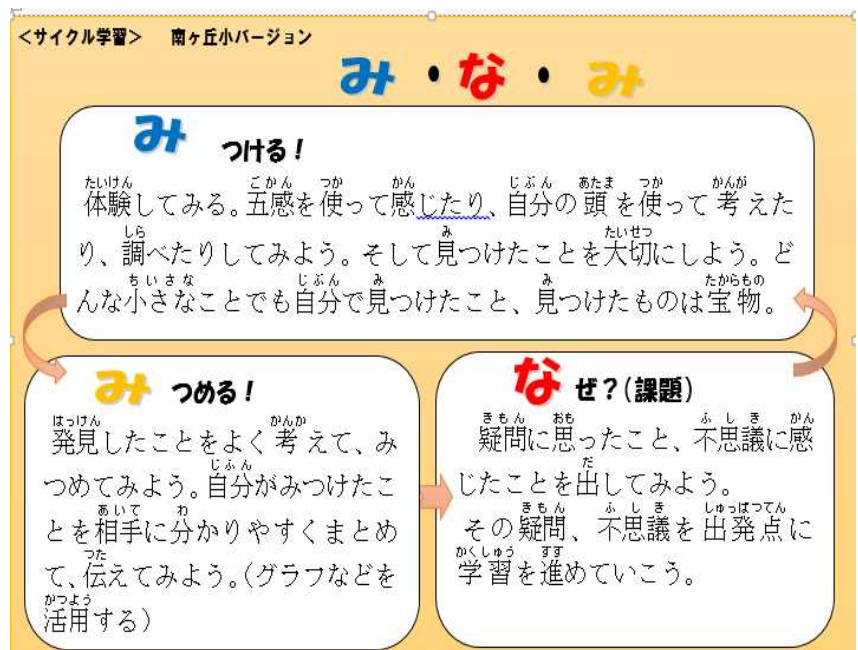


図2 南ヶ丘小版サイクル学習

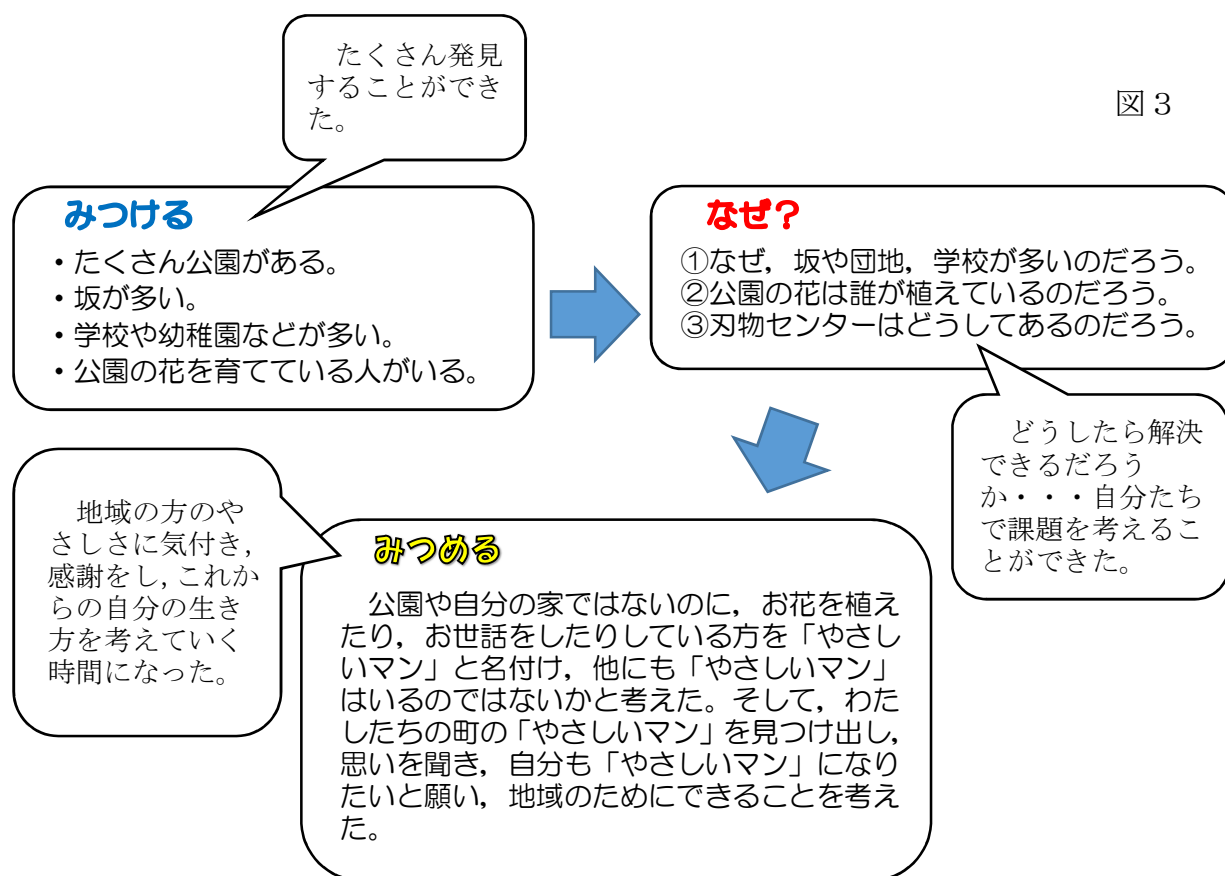


実践事例

単元名：3年生「わたしたちの町のやさしいマン・やさしい自分 パート1」

単元目標：校区の「やさしいマン」を探したり，地域の人々と交流したりすることを通して，地域の様々な取組を知り，支え合っていることに気付き，地域の一員として町づくりに関わることができる。

まず，「南ヶ丘小版サイクル学習」の中の「みつける場」として校区探検を位置付けた。児童は，校区にはいろいろな人がいることや，公園がたくさんあることに気付き，その公園で花を育てている人を見付けた。その後，校区探検をまとめる学習の中から，「公園で花を育てていた人は，どんな思いで花を育てているのだろう」という疑問「なぜ」が出てきた。この「なぜ」を次の課題にすることで，地域の方の思いを聞く場につながり，地域の方のやさしさに気付き，自分の生き方を考えていくといった「みつめる」場を生みだした。



このように学習を進めていく中で児童は，自分たちの疑問から課題が生まれ，次の探究活動へ進んでいくという学習の流れに対して，満足感をもっている様子が見られた。この「南ヶ丘小版サイクル学習」の学習過程のように，児童の願いを大切にして授業を仕組むことは，教科学習にも生かされ，主体的な学びに結び付けることができた。

図3 「みつける・なぜ・みつめる」を位置付けた年間指導計画

平成28年 3年生総合的な学習【地域】年間指導計画 全 70 時間

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
テーマ	年間を貫く課題 地域を紹介しよう！ 南ヶ丘情報局											
子どもの取組	地域を知ろう<20>			地域のためにできること<28>			地域のよさを伝えよう<12>					
予想される活動及び行事	<p>みつける</p> <p>【なぜ？】</p> <p>【みつめる】</p>			<p>なぜ？</p> <p>【みつめる】</p>			<p>みつめる</p>					
進め方の留意点	<p>【自分の疑問から課題をみつける力】</p> <p>【調べる方法や手段を身につける力】</p> <p>【色々と協力し、課題を解決する力】</p> <p>【色々と協力し、課題を解決する力】</p> <p>【分かちやすい方法で表現する力】</p> <p>【色々と協力し、課題を解決する力】</p> <p>【分かちやすい方法で表現する力】</p>											



② 「伝える場」を効果的に位置付ける。

生活科・総合的な学習の時間の最後の出口として、2月に全校児童や保護者、地域の方に1年間学んできたことを発表する「発信！南っ子タイム」を設け、一人一人が学んだことを伝えられるように工夫した。全校や地域の方など、それぞれ伝えたい相手は異なるが、全校集会などの自分たちの思いや願いなどを伝える場を意図的に単元指導計画に位置付けた。



2月に行う「発信！南っ子タイム」の様子。学んできたことを電子黒板に映し出し、発表している。
(6年生)

実践事例

単元名：4年生「考えよう！私たちのごみ問題」

単元目標：自分の生活する家庭や学校のごみの現状を調べる活動を通して、処理する方法別にごみが分別されていることやリサイクルがごみの減量と資源の節約につながっていることに気付き、更なるごみの減量化に向けて自分から進んで行動することができる。

南ヶ丘小のごみと給食の残量の実態を調査して、その結果を分析したところ、児童から「児童集会で全校に伝えたい。」という願いが出てきた。発信する相手意識を明確にしたことで、自分たちが何をどのように伝えればよいかについてさらに考え、深い学びを実践することができた。このように、相手意識をもつことで、伝え方を工夫できるようになり、一人一人の話す姿からも、伝えたいキーワードを強調して話すなどの成長が見られた。



「発信！南っ子タイム」の様子



【研究内容2 学習活動における指導・援助の工夫】

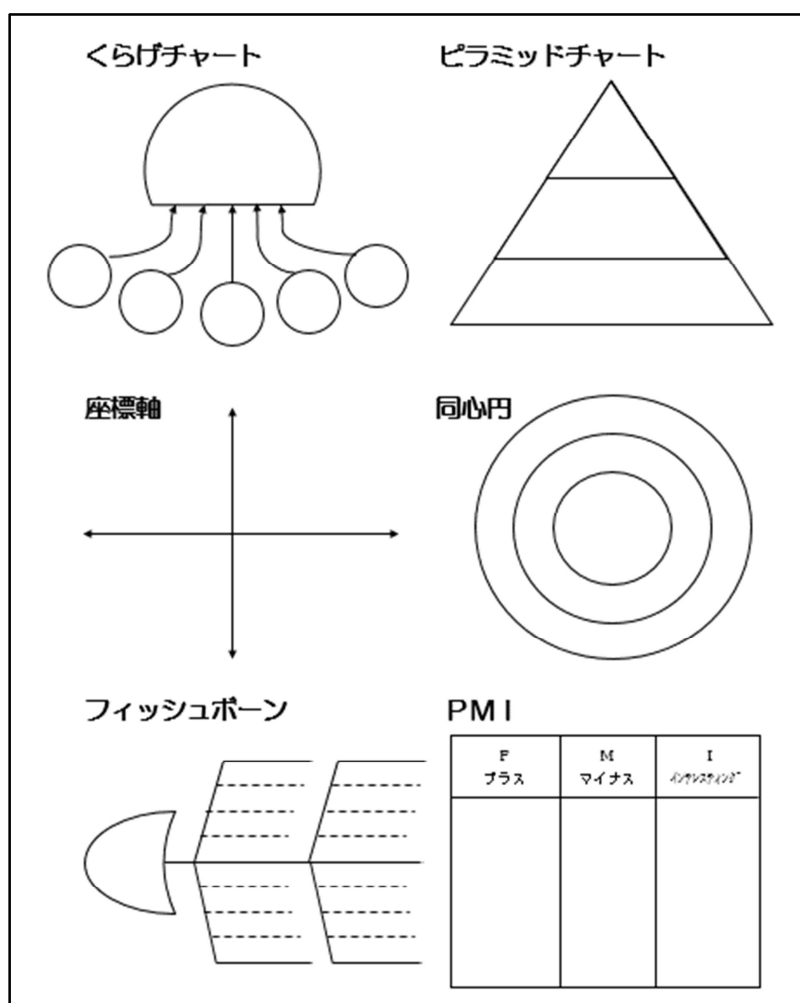
- ① 小集団による話し合い活動の場を位置付け、「思考ツール」を活用し、児童の考える力、伝える力を高める。

「思考ツール」とは、「考えを進める手続きやそれをイメージさせる図」である。「思考ツール」を活用することで、頭の中にあるイメージや情報が視覚的にとらえられたり、簡単に操作したりすることができ、情報や考えを見付けやすくすることが可能になる。まさに対話的な学びを実現させるものである。また、平成22年に文部科学省が示した「今、求められる力を高める総合的な学習の時間の展開」にも、児童に思考させるための方法として、KJ法やベン図、座標軸などの「思考ツール」が紹介されており、今後の活用が期待されるツールの一つであると考えられる。(資料4)

総合的な学習の時間では、課題設定、整理・分析、表現・まとめなど多くの場で話し合うことが必要になってくる。その時に「思考ツール」を活用することは、自分の考えの視点を整理し、相手を納得させる伝え方を工夫するのに有効であると考えられる。

また、総合的な学習の時間では課題を「～を考えよう」と設定することが多いが、児童にとって「考える」ということは漠然としていて難しい点がある。そこで「考える」ことは、「比較する」「分類する」「多面的にみる」「関連付ける」という思考であることを示した。(資料5) このように具体的な姿を示すことで、思考力を身に付けることができると考えた。

実際、「思考ツール」を活用することによって、児童からは「話し合いがしやすくなった。」「仲間の意見を聞こうと思えるようになった。」などの感想が出ている。本校では、他教科でもこの「思考ツール」を活用し、成果を上げてきている。



資料4 思考ツールの例

<思考スキルの習得段階に必要なこと>

*下の図は6つの思考スキルの学年目標です。

	定義	1年	2年	3年	4・5年	6年	思考ツール
比較する	複数の事象の相違点や共通点を見つけ出す。	同じと違いを見つけると。	視覚情報以外から視点を見つける。	多様な視点で比べる。	意図や目的に応じて比べる。	「比較する」思考スキルについて説明をする。	ベン図
分類する	物事をいくつかのまとまりに区分する。	仲間分けごっこを通して、複数の視点に気付く。	視覚情報以外から視点を見つける。	意味をもって分ける。	意図や目的に応じて分類する。	「分類する」思考スキルについて説明をする。	Xチャート Yチャート KJ法
多面的にみる	視点や立場を変えてみる。	複数の視点から情報を集める。	視覚情報以外から情報を集める。	複数の視点から根拠を提示する。	意図や目的に応じて多面的にみる。	「多面的にみる」思考スキルについて説明をする。	くま手図 フィッシュボーン図 ボーン図
関連づける	既習事項や経験と事柄を結びつける。		ことばとことばにつながりを見つける。	意味をもって、ことばとことばにつながりを見つける。	図や目的に応じて、ことばとことばにつながりを見つける。	「関連づける」思考スキルについて説明をする。	コンセプトマップ
構造化する	複数の事柄の関係を構成する。		視覚情報以外から情報を集める。	調べたこととわかったことをもとに、主張を組み立てる。	調べたことと分かったことをもとに、主張を組み立てる。	「構造化する」思考スキルについて説明をする。	なぜなにシート ピラミッドチャート
評価する	物事の是非、善悪等を指摘し、自分の意見を述べる。		学習を振り返り、わかったことと疑問点を整理する。	判断した結果を理由と合わせて述べる。	判断した結果を理由と合わせて述べる。	「評価する」思考スキルについて説明をする。	PMIチャート

資料5 学年ごとの思考スキル目標
～参考 思考ツールを使う授業 関西大学初等部～

実践事例

単元名 : 4年生 「知ろう！環境問題」

本時の目標:EM菌によるプール掃除が下学年には理解されていない実態をもとにEM菌を使ったプール掃除の良さを伝えたいという願いを持ち、理由を示しながら下学年に伝える内容を交流することができる。

思考ツール:くらげチャート(根拠や要因を探す場合に有効なツール)

活用の意図:「伝えたいこと」の問い(くらげの頭)に対して、複数の要因(くらげの足)を示す構造となっている。このため要因が一つではなく複数あること、要因同士にも何らかの関連があることが視覚的にとらえやすい。本時の場合は、「EM菌を使ったプール掃除について」低学年に伝えたいことをグループで多面的に考えさせた。

〈くらげチャートでの児童の考え〉

くらげの頭:「低学年に伝えたいこと」

くらげの足:EM菌を使う思い〈2人〉

田んぼにやさしい・生き物にやさしい・魚にやさしい・川にやさしい
森にやさしい・体にやさしい

そうじがしやすい・よごれが落ちる・よごれがうきだす

効果・はたらき・説明

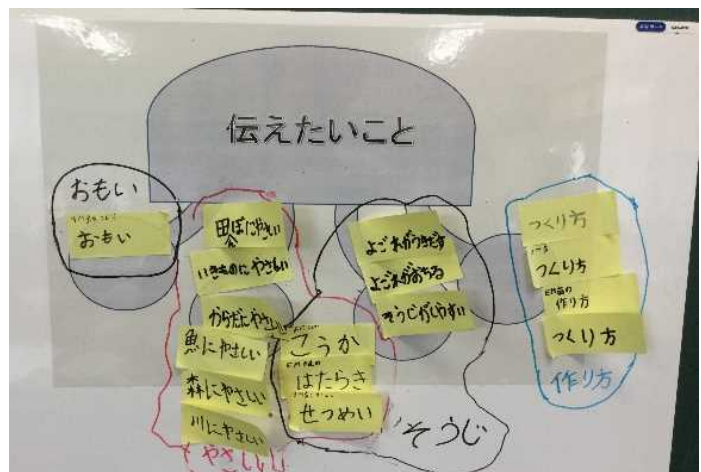
作り方〈3人〉

児童一人一人が付箋紙に「低学年に伝えたいこと」を書き、グループごとにくらげチャートを貼っていく。その時、一人一人が付箋紙に書いた自分の考えを説明しながら貼付するので、確実に全員が発表することができる。それぞれの考えの共通性や相違性を見比べながら整理するので、グループとしての意見をまとめていくことができる。実際に、本時では、EM菌があらゆるものに「やさしい」ものであり、「そうじ」

に効果的であることをそれぞれまとまりと捉え、児童が「やさしい」「そうじ」とペン書きをし、類型化しながらまとめていくことができた。

このような学習活動を通して、今まで気付かなかった他の児童の考えを取り入れ、多面的な見方ができるようになってきた。

くらげチャートを使い、「EM菌を使ったプール掃除について」低学年に伝えたいことを多面的に考える。
(4年生 まとめ・表現)



実践事例

単元名 : 6年生 「関の伝統・すてき発見！」

本時の目標 : 刀匠さんや刃物センターの方の関の刀や刃物についての話から、疑問に感じたことを交流する活動を通して、今後調べたいことを焦点化することができる。

思考ツール : ピラミッドチャート (内容を絞り込む場合に有効なツール)

活用の意図 : 「関の刀や刃物について今後調べたいこと」に対して、一番下の階層に「個々の調べたいこと」について考えた内容を付箋紙に書き貼付する。それらの中から大事だと思うものを、取捨選択したりまとめたりしながら次の層に付箋紙を移動させ、絞り込んでいく。根拠を明確にしている説得力のある意見かどうかという視点で取捨選択することで、混沌としていた内容を絞り込んで整理することができる。

〈ピラミッドチャートでの児童の意見〉

上層の意見 : 外国にも身近に刃物があるのに、なぜ関に買いに来るのか。

戦国時代に愛用されていた日本刀が、なぜお守りとして使われるようになったのか。

中層の意見 : なぜ、関の刀はよく切れるのか。

なぜ、切れることにこだわるのか。

下層の意見 : なぜ、刃物づくりに100点満点はないのか。

なぜ、昔の刃物は、片面の刃しかないのか。

児童は初め、個々の調べたい内容を意欲的に付箋紙に書いていた。グループの交流では、同じ考えや説得力のある意見に焦点化され、「ピラミッドチャート」の中層から上層に絞られた。教師はグループを回り、話し合いを見届け、スムーズにできていないグループを中心に支援した。本時では、関の刃物と外国の刃物を比べること、刀を愛用していた戦国時代とお守りにしている現代とを比べること等、比較して考えていた。

このような学習を通して、比較したり、関連付けたりする力を身に付けていくことができた。

「ピラミッドチャート」を使い、「社会見学のまとめ」を終えた後、新たな疑問やさらに知りたいことをグループごとに絞り込む。(6年生 課題設定)



② 「ルーブリック」を生かした自己評価を取り入れ、児童の学習意欲を高める。

「ルーブリック」とは、児童の学習到達状況の評価するための評価基準表のことである。児童自身が納得して作った評価基準である。〈文科省 平成27年8月「論点整理」より〉

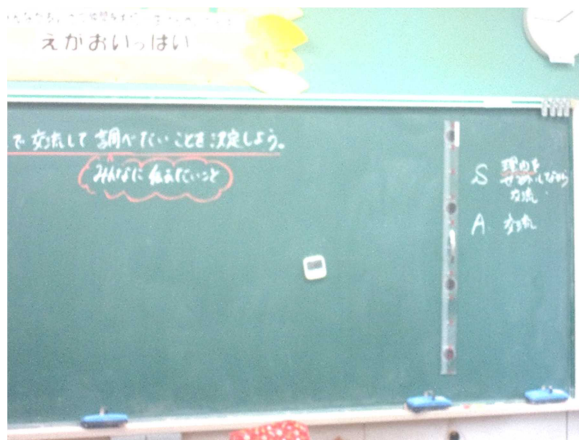
授業の課題設定後に、児童自身が納得して評価基準「ルーブリック」を作成することが、主体的な取り組みにつながると考えた。

授業前半の課題提示の後に、教師と児童で「ルーブリック」（評価基準）を決める。例えば、A「まず自分の考えを言えること」とし、S「さらに自分の考えの根拠も言える」とし、下記のルーブリックを学級全員で確認する。

A：自分の意見を伝えることができる。

S：根拠を示しながら自分の意見を伝えることができる。(S=A+α)

このように具体的な評価基準となる姿を児童が自らイメージできるようにし、最後に授業の振り返りで自己評価を行う。「ルーブリック」を取り入れることで、児童は目指す姿が明確になり、より主体的に取り組もうとする姿が見られるようになった。



③ 考える力、伝える力を高めるために ICT 機器の効果的な活用を図る。

電子黒板やタブレットなどの ICT 機器の活用では、具体的に前時の写真等のデータを再現させることで、本時の学習のねらいや活動を明確にすることができる。また、発表原稿作りや、自分やグループの考えの発表にも ICT 機器を効果的に活用することができると考えた。

実践例 1・2年生 グループ交流の場

単元名：「図書館のひみつを1年生に伝えよう」
ICT の活用：

グループでタブレットに図書館の画像を示しながら、図書館の秘密を説明した。聞いている1年生もタブレットの画像の中から「これは何かな？」と質問をする等、タブレットを使用したことで分かりやすく説明できていた。



タブレットを覗き込みながら、図書館の秘密を興味深く聞いている。(1・2年生)

実践例 4年生 グループ交流の場

単元名：「知ろう！環境問題」
ICT の活用：

下学年に伝えたいことをグループで交流する場で、自分の考えを説明するとき画像を見せながら説明した。EM 菌の効果や活動内容等を写真から振り返ることで、伝えたいことを明確に想起することができ、話し合い活動が活性化できた。



タブレットを使い、根拠をもって伝えたい理由を話すことができた。(4年生)

実践例 2年生 全体交流の場

単元名：「みんなで作ろう フェスティバル」
ICT の活用：

身近な材料を集めておもちゃを作り、遊び方を工夫して友達と楽しく遊んだり、適切な対応の仕方を身に付けたりする単元である。グループごとにおもちゃの動きを確かめていたことから、おもちゃを跳ばしたその画像を観ることで、工夫した点を学級全員で確かめることができた。



タブレットで作ったおもちゃの動きをビデオに撮り、どこまでおもちゃが跳んだか等、その工夫のよさを全員で確かめた。(2年生)

このように ICT 機器の活用は伝える場だけでなく、導入場面やグループ・全体での意見交流の場でも有効であった。

6 研究の成果と課題

(1) 成果

今回の研究では、地域の人、伝統に携わっている人など多くの人とかかわり、その人たちの思いに触れることで、児童の心は揺さぶられ主体的に学びたいという意欲につながった。そして、地域の人たちにかかわって学び深めたことは、自分をみつめるきっかけとなった。また、自分たちが考えたことや学んだことをより深めることと、多くの人に伝える場を増やしていくことで伝える力が高まっていくことが分かった。その結果として、全国学力・学習状況調査（H28）、県学習状況調査（H27）では、全学年の国語B（活用力）が県平均を上回った。このような児童の変容は大きく、次のような成果が考えられる。

【研究内容1】

○み（みつける）・な（なぜ）・み（みつめる）学習過程を位置付け、単位時間の役割を明確にしたことで、児童が主体的に課題をもち、解決していこうとする姿が見られた。また、総合的な学習の時間では、自分たちが疑問に思ったことをテーマとして取り上げ追究し、仲間とともに考えを深め合う学習を繰り返すことで、主体的に取り組む姿が多く見られるようになった。

【研究内容2】

○多くの場で話し合い活動を取り入れ「思考ツール」を活用したことで、思考が可視化され、整理されて意見が伝えやすくなり、さらに活発な話し合いが行われるようになった。

○自分たちの活動の評価基準を自分たちで決めた「ルーブリック」を取り入れたことで、目指す姿が明らかになり意欲的な学習につながった。

○ICT機器を活用することで、本時までの学習を容易に思い出すことができ、グループ内での追究や交流が深まり、さらに分かりやすく伝えようと工夫する姿が見られるようになった。

(2) 課題

「自分をみつめる子」への育成をさらに高めるためには、人とかかわり、疑問や課題を見つけ、解決していくなかで、自分の生活や生き方をみつめられるかどうかが大切である。今後、さらに児童が主体的に活動できる題材の開発や体験、効果的な人とかかわり方について見直すことが必要である。課題は大きく次の3つである。

【研究内容1】

●探究学習を行っていく児童にとって、魅力があり、児童らしい追究の広がりや深まりのある題材の開発や単元構成をさらに検討していく。

【研究内容2】

●児童が、深く考えたり、自分の生き方を見つめたりすることができる教師の発問や、効果的な指導援助の在り方をさらに追究していく。

●「思考ツール」「ルーブリック」「ICT機器」は、今後、他教科でも取り入れ、児童が学びに必要なものとして活用できるようにする。

<生活科の目標>

具体的な活動や体験を通して、自分と身近な人々、社会及び自然とのかかわりに関心を持ち、自分自身や自分の生活について考えさせるとともに、その過程において生活上必要な習慣や技能を身に付けさせ、自立への基礎を養う。

<総合的な学習の時間の目標>

横断的・総合的な学習や探究的な学習を通して、自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育成するとともに、学び方やものの考え方を身に付け、問題の解決や探究活動に主体的、創造的、協同的に取り組む態度を育て、自己の生き方を考えることができるようにする。

～学習指導要領解説より～